

令和2年度第1回前橋市総合教育会議会議録

日 時 令和2年7月14日（火） 午後3時00分から午後4時00分まで

場 所 市役所11階南会議室

(市長)

山 本 龍

(教育委員会)

教 育 長	吉 川 真由美	教育長職務代理者	湯 澤 晃
委 員	奈 良 知 彦	委 員	石 井 裕 美
委 員	溝 口 健 介		

(事務局)

教 育 次 長	高 橋 宏 幸	指 導 担 当 次 長	山 中 茂 樹
総 務 課 長	片 貝 伸 生	学 校 教 育 課 長	都 所 幸 直
青 少 年 課 長	阿久澤 正 彦	総 合 教 育 プ ラ ザ 館 長	板 橋 均
前橋高等学校事務長	鵜 野 明 広		
政 策 部 長	中 畝 剛	情 報 政 策 担 当 部 長	松 田 圭 太
政 策 推 進 課 長	草 野 修 一	情 報 政 策 課 長	岡 田 寿 史

教育次長 これより令和2年度第1回前橋市総合教育会議を開会いたします。本日の進行は事務局で務めさせていただきます。それでは最初に山本市長からごあいさつをお願いいたします。

市長 教育委員の皆様、ありがとうございます。前橋市は、ICTの力で子供たちの学びを応援していこう、そして、ICTによる恩恵を皆さんに配っていきたいという思いでICT活用都市として取り組んできました。ところが今般、感染症の拡大によって休校という形になり、この意味の中で新しく、ICTが子供たちの学びの継続のために役立つ、そのような思いで取り組ませていただいております。国によるGIGAスクールという新しい取り組みも我々は包含しながら、教育長はじめ取り組んでいるところだろうと考えています。本日はその中身に関する議論であろうと思っています。見識の中で様々な意見をいただければと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

教育次長 ありがとうございます。それでは、協議事項に入らせていただきます。

議題 ICTを活用した効果的な学びについて

教育次長 本日の議題につきましては、「ICTを活用した効果的な学びについて」でございます。はじめに、教育長より一言申し上げさせていただきます、その後概要をご説明し、意見交換をいたします。それでは教育長、よろしくをお願いいたします。

教育長 本日のテーマは、「ICTを活用した効果的な学び」です。皆さんと考えを深めていきたいと思っております。

新型コロナウイルス感染症の拡大で、にわかに教育現場がICTの整備で注目されるようになりました。学校の休業中においては学習保障の面、また、いかに学校と家庭を繋ぐか、いかにオンライン学習を進めるかという観点で、ICT環境の整備の必要性がクローズアップされるようになりました。GIGAスクール、また1人1台タブレットの導入の流れが急速に進んでおり、非常に大きな事業であるだけにハード面の整備、つまり機器の調達及びそれにかかるコストにどうしても注目が集まりがちです。PCが無ければ子供たちの学びを深めることはできませんが、一方で、子供たちにどのような効果があるのかということ、しっかりと理解をしておく必要があると考えます。新学習指導要領では、小学校から高校まで情報活用能力を言語能力と同様に、学習の基盤となる資質、能力と位置付けております。ICTの環境整備というのは、子供たちのためばかりではなく、教員の事務効率の向上によって多忙化が軽減されたり、また、保護者にとっても学校との連絡が容易になるなど、

非常に大きなメリットがありますが、本日は子供たちの学びはどのように変わるのかということに焦点を当てて、皆さんと一緒に話し合いをして、認識を共有させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

教育次長 ありがとうございます。続きまして、概要につきまして、指導担当次長より説明させていただきます。

指導担当次長 指導担当次長の山中です。本日の総合教育会議では、これからのICTを活用した教育について、幅広くご意見をいただきたいと思います。

現在、国からは、GIGAスクール構想として、小学校1年生から1人1台の端末を持たせるという方向が出され、令和5年までの計画でしたが、実現の前倒しが求められています。本市では、既にご存じのように、中学3年生を対象にオンラインの学習アプリやタブレットの貸与を行い、実証実験を始めたところです。本市は、ICTを活用した教育の推進にかねてより力を入れて取り組んで来ました。教師用としては、既に1人1台のタブレットを持ち、デジタル教科書をはじめとする様々な教材を提示する際に日常的に活用しています。

児童生徒用としては、各学校40台のタブレットと校内の無線LAN環境を整え、授業でのICT活用も進めてきています。例えば、写真にありますように、グループに1台のタブレットを持ち、教師から配信された課題や資料をグループの中で共有し、考え方を話し合ったり、2人に1台のタブレットを使って課題への考え方を整理し、書き込んだり発表したりといった活用が見られます。

また、ご覧の写真のように、1人1台のタブレットを持って自分の作品を記録し、後で見返しながら鑑賞や振り返りをしたり、グループやそれぞれの考え方をタブレット上でまとめられれば、それを大型テレビ等の画面に集約し、比較検討しながら全体で話し合い、学習を深める、といった形での活用も見られています。

これらは、40台のタブレットを複数のクラスで分かち合って活用することによって積み上げてきたものです。ただ、タブレットを子供たちが授業の中で使うには、授業の前から準備が必要となり、準備に時間がかかることは1つの課題となっています。1人1台が常に手元にあれば、学習における活用のあり方が大きく変わることに繋がります。

その環境整備に向けて、国がギガスクール構想を打ち出しています。当初は令和5年度までにとされた計画でしたが、今年度中に達成する方向で方針が改められました。群馬県も1人1台の整備を推進する方針を掲げています。これによれば、1人1台端末と高速大容量のネットワークを整備することになります。そして、これまで積み上げてきた学校の教育実践のノウハウと組み合わせて、より良い教育環境が作れるものと

捉えています。

国では、この環境による学びの変容を3つのステップで図のように示しています。これによれば、ステップ1のすぐにでもどの教科でも使える環境が整うことで、ステップ2として各教科の学びの質を高め、さらにステップ3では教科の学びが発展し、社会課題等の解決や将来の夢の実現に繋がっていくということになります。

教育委員会としては、目指す子供の育成に向けて、1人1台環境におけるICTを活用した教育の構想をご覧の図のような構造で考えています。1人1台端末の環境整備を基盤とし、左右にある教員にとっての業務の効率化や指導力の向上を進めていきながら、中央の三角形で表されているように子供たちの学びを充実させていきます。学びの中心となるのは、各教科等の授業における効果的な活用です。これに並行して、情報モラル、リテラシーを育成していきます。また、一方でオンラインによる学びの保障を可能とします。これにより、いわゆる個別最適化した学びを含め、「自らの可能性を広げ、新たな価値を作り出す学び」を実現し、最終的に、本市の目指す子供である「多様な人と協働しながら、主体的・創造的に活動する子供」を育成していきます。この図の左右にある業務の効率化と指導力の向上も大きな要素となりますが、本日は、中央にある「子供の学び」の部分について、以下、話を進めてまいります。

まず、子供たちの学びの中央に位置づけた「各教科における効果的な活用」について説明いたします。ご覧のように3つの側面から活用の仕方を考えることができます。

「A 個の状況に応じた学習ツールとしての活用の充実」については、1人1人が必要な時に必要な形でタブレットを道具として使い、検索したり、学習アプリで個別学習を進めたりする活用の仕方です。

「B 授業支援システム等の活用による協働学習の充実」については、個々のタブレットを共通のシステムで結び、教師から一斉に課題や資料を送付したり、個々のタブレットの内容を集約したり、転送したりして、集団での学習、交流を充実させます。

「C 新たな表現方法、創造的な活動の充実」については、音楽の作曲アプリを使って自分なりの表現をするなど、これまでとは違った表現方法として活用します。プログラミングによって自分の考えを表現することもその1つです。

さらに、ABCのそれぞれについて具体的な活用場面を紹介します。

Aの学習ツールとしての社会科での活用です。社会科では、教科書や資料集から共通の情報を得た後、話し合っ解決すべき課題を決定し、その後調べたり、話し合ったりしていきます。

その課題を決める際や課題を追究する中では、教科書や資料集など共通の資料では十分でなく、1人1人が資料にあたって調べることがあり

ます。少し字が小さいですが、画面にありますのは小学校社会科で使用している「わたしたちの前橋」という副読本です。ここに顔写真がありますが、この顔写真が出ているページには、別添で音声の出る動画資料があり、こういったものを子供たちが自分で活用しながら調べていくこともできます。

また、学校外での見学や、当事者にインタビューをするなどの活動もありますが、その記録を残す必要があります。その際、ICTやインターネットも有効なツールです。タブレットが1人1台手元にあることで、時間を有効に使った調べ活動が行えるとともに、より多くの事実が調べられ多様な考え方が生まれます。興味関心に応じた学びが進められ、より学習が主体的に行われることと期待しています。

学習の過程では、1人1人が持つ考え方を話し合っ、より深めたり確かな事実に集約したりします。1人1台の端末にそれぞれのそれまでの追究結果があれば、それを素早く共有し、比較、検討することができます。ご覧の画面は、算数図形の面積の求め方について、1人1人が考えた方法をタブレット上に表し、それを集約したものです。現在の教室環境でもその仕組みはあり、実践されてきていますが、1人1台化によりスムーズで手軽に出来るようになります。また、WEB会議システムが使えることで、学級内に留まらず、地域の方や他校との間でこうした交流を持つことも可能となります。これは、今求められている、対話的な学びの充実にも繋がっていきます。

さらに、タブレットは表現の1つのツールともなります。音楽の作曲アプリでは、画面上の音符を操作することで、その都度メロディーを確認することができ、それがそのまま記録できます。これまで、楽器の演奏上の制約や、譜面を扱う知識の制約がありましたが、それらと関係なく表現の幅を広げます。

また、例えば算数では、正多角形の学習の最後に、学んだ知識を活用してプログラミングを行います。画面上のキャラクターに移動の距離と方向転換の角度を指示する命令を組み立てることで、正多角形を描画します。こうした活動も1人1台の環境があることで、各自がじっくりと試行錯誤しながら学び、理解を深めたり、考えや表現を広げたりするなど、学習の効果がさらに高まります。

以上のような各教科での学習における様々な活用ができるものと考えています。このような各教科の活用と並行して大切なのが、情報モラル、リテラシーの育成です。この中には、ICT機器の活用スキルも含まれます。この力は、これからの時代を生きる上で欠くことの出来ない力でもあります。

例えば、特別活動で日常生活の中の課題として取り上げたり、総合的な学習の時間の中で、活動を通して学んだり計画的・実践的に学習できるようにすることが大切です。これまでも様々な取組をしてきています

が、1人1台となることで、子供にとっても、より身近な問題、喫緊の課題となり、より実感を伴って学ぶことができると思います。また、各教科の授業や、生活の中での連絡等の場面が増えることで、日常的な学びとして、リテラシーの育成ができると考えています。

1人1台のもう1つのねらいとして、オンラインによる学びの保障があります。今回の一斉休校中、学校では様々な手立てを講じて、学びを保障してきました。その多くの部分が、オンラインによって、家庭と学校双方にとって、よりスムーズに行えるものと思います。例えば、学習支援システムでは課題を渡し、受け取ることが一度に可能となりますし、学級の子供たちとオンラインで朝の会ができれば、人間関係作りや学級としてのつながり作りにも役立つことでしょう。オンライン教材による個別学習や先生が行うオンライン授業と組み合わせれば、先生も子供も過重な負担なく、学習が進められることと思います。これらは、病気や不登校で長く教室に行けないでいる子供との繋がりを作る上でも大変役立ちます。教室での学習がどう進んでいるのか、不安があれば、オンラインで教室と結ぶことも出来るでしょうし、その居場所が学習の場となれば、学習面での不安解消にも大いに繋がるものと考えます。

なお、本市では、6月から8月末まで、中3生を対象としてオンライン教材を導入し、実証実験を行っています。主に5月までの学習を補うことを目的としています。想定されている効果としては、自分で分からないところや確かめたいところを選んで学習し、その回答が確認、修正できることから、自分に合った学び直しが効率良く行うことが出来ると考えます。なお、教師側としても、個に応じた幅広い課題を準備せずとも、適した教材を与えられるとともに、1人1人の取組や習得状況が自動的に処理されていることから、その分の負担を軽減し、その後の指導に生かせるという利点があります。

以上のように、様々な可能性を持つICTの活用ですが、その効果を高めていくために、実際に1人1台の端末が行き渡る前に、検討すべき課題も見られます。現時点で考えられるものを指導面、運用面、環境整備面から整備してみました。

まず、指導面の課題ですが、その第一は授業改善です。例えば、ネット検索で調べて終わりではなく、そこから考え、表現する授業にしていくなど、本来のねらいを達成し、目指す学びを表現するICT活用の授業を実現したいと思います。また、9年間を見通した情報モラル、リテラシー育成のための全体的な計画や体制作りも必要です。1人1台となることで状況が大きく変わることから、各教科の学習内容との関連も併せて考える必要があると思います。これらを含め、環境の変化に対応する実践的な教職員研修を充実させていくことも重要です。

課題の2つ目として、運用面に関わる課題があります。例えば、紛失、故障などの管理上の問題、持って来ることを忘れてしまって学習に

ならないということもあるでしょう。また、インターネットに繋がる端末ですので、ネット社会との関わり方をしっかりと身に付けていくこととともに、家庭に持ち帰った時の利用についてなども考えなくてはなりません。さらに、子供の段階からタブレットを長時間使用する場合の健康への影響も、まだ科学的な知見が明確ではないこともありますが、今後はしっかりと考える必要があると思います。こうした点も含め、子供たちにとって望ましい使い方について、保護者の皆さんにご理解いただくことが大変重要です。

最後に環境整備についてです。言うまでもなく、ICT機器は常に進化しており、1人1台の環境が整っても、状況が変化することも想定されます。教室での使用を考えた場合、大きなスクリーンが必要になることもありそうです。児童生徒用のデジタル教科書が1人1人の端末に用意されるようになれば、操作にタッチペンが必要との声もあります。学校ごとに必要なアプリも違って来るかもしれません。こうした状況の変化に対応できるよう、ICT支援員の存在も重要です。

以上、雑駁ですが、本市の現状から、今後の検討課題までをお話いたしました。本市のICTを活用した教育活動がさらに充実するよう、忌憚のないご意見をいただければと思います。よろしく願いいたします。

教育次長

ありがとうございました。それではここから意見交換いただきたいと
思います。まずは教育長からお願いいたします。

教育長

平成26年度から1校40台のタブレットが既に配備されていて、各教科での研究がわりと進んでいるという印象を持っています。1校40台を1人1台にすると何が変わるのかと考えると、3つ変わるのだと思います。まずは、すぐに使える。先生方が準備をする必要が無く、また、近くにあるため子供たちもすぐ持ってきてすぐに使える。2つ目がどこでも使える。1人1台になれば家に持ち帰ることも出来ますし、また、部活など外に持って行くことも出来ると考えられます。3つ目が、一人で使えるということだと思います。一人で使えるとなると、出来ることがとても多くなると思っております、さきほど算数の時間の、それぞれのお子さんの考え方がホワイトボードに出されていましたが、他の児童生徒さんの考えを自分と比較して考えることが出来る。グループワークですと、どうしても機器の扱いに慣れたお子さんに発表や考えることが委ねられたりすると思いますが、一人でとことん考える時間を与えることが出来るのではと思います。また、先生方の立場としても、手を挙げにくい子は指せないと思いますので、分かっているもなかなか手を挙げたくない、自分が理解していることを先生に分かってもらえない子もいるかもしれません。そのような時に、自分の考えたこと、考えられたことをこのようにタブレットで表現をすることが出来ると、教師か

らはどの子がどの程度理解しているかしっかりと把握することが出来るようになるのではと思います。

今回、新学習指導要領が改訂されましたが、10年毎に学習指導要領は改訂されます。次、10年後になった時には、個別最適化をいかに図るかということがテーマになってくるとも言われています。一斉授業ではなくて、1人1人の学びに学校がどう寄り添っていくのかということが問われるようになってきて、その時には、1人1人がどれくらい先生から見えているのかということが重要になってくるのかなと思います。この10年で大きく社会は変わるとは思いますけれども、やはり1校40台から1人1台のタブレットに変わることによって、教育現場も子供の学びも大きく変わるのではという期待を持っています。

奈良委員

指導担当次長の丁寧な説明で、1人1台持たせて子供たちが自ら操作することで、求めるもの、学びたいものについて深く突っ込んで勉強できると思いました。教育長がおっしゃるように、先生方が1人1人の習熟について丁寧に見られるというのも大きなことで、ICT化が進むことに反対する人はいないのではと思っています。実際に社会でもこの分野はとても進んでいて、私の出席する会議ではほとんど紙資料は無いですね。タブレットを持って行って、色々な資料が瞬時に取り出せる状況を早いうちから子供たちに身に付けさせることで、実社会に出たときに大きな力になると思います。その中で現在の中3生への取組については、生徒から意見を聞かせてもらえればと思っています。

何かを始める時には、最後に出ていた管理や故障など様々な問題があると思いますが、それも学びの1つだと思います。これはしっかり管理するものだ、トラブルが出たときにどう対応するのか、それも学びの1つと捉えて良いと思います。もちろんそれを望んでいるわけでもないですが、そういうことも起きるので、先生方、生徒の対応能力をどう伸ばすか、また、今も色々な情報が飛び交う中で、どう対応するのかということも考えていかなければなりません。そのようなことも含めて、ICT化を早く進めてほしいと思います。

溝口委員

ICTを活用していくというのは絶対的に必要なことになってくると思います。実際に今の大学生を見るとケータイを使っている、レポートもケータイで打っています。パソコンすら持たない子がいて、それで十分に出来ている。これが5Gになれば情報量処理する能力が上がるので、ここ数年で今の状況と変わってしまっていて、それにどうやって制度を追いつかせるのかという問題があります。私たちからすれば、パソコンを持ってパソコンに打ち込んでレポートを書くという認識がありますが、そんなことすらしない人達が出てきているわけで、どんどん機械の性能が発展してしまうと、使う人がどうそれに追いついていくのか、

またその時に機械をどう買い替えていくのかという問題が起こります。そのようなところが凄く大変だろうなと思います。今の仕様に合わせていると、数年先にはもうそれが古い物になってしまいますから、それにどう対処するのかという問題です。

それから、こういう物では出来ない事とは何か、ということについて、教育現場の方が分かってらっしゃる必要があります。これではやれない、要するに、タブレットを持って出来ることが凄く沢山になってしまって、これでは絶対に出来ないもの、こういう物では出来ない教育とは何なのか、ということをはっきりと認識する必要があります。現場の先生方がきちんと議論されて、「ここだけは機械に頼らずやるべきだ」という事がはっきりしていること。どう使うかの可能性はどんどん広がっていくと思いますが、それでは対応出来ない事をはっきりさせる必要があると思います。

また、子供たちからすれば、これを1台持つておくと教科書をせつせと担いで運ばなくて済む、小さいお子さんが教科書を持って歩くことを考えると、それをしなくて済むのは楽だろうなと思います。色々と考えていかなければならないことはありますが、機械の発展するスピードにこちらがどうやって追いついていくかというのが凄く難しいだろうと思います。

市長 今の溝口先生の発言は、児童精神科医として、機械では出来ない学びというところを何か言いたくて言っているのでしょうか、そこを言っていた方が良いでしょう。

溝口委員 何か言いたくてということでは無いですが、例えば部活もそうですが、実際にやってみないと分からない事ってありますよね。学校に皆が行って、学校の中で出来る事というのは、そこに凄く重点が置かれるようになります。知識として得ようとするならば、タブレットさえ持っていれば今日の授業を聞かなくても別に問題無いということがあるかもしれませんが。学校へ行かないと体験できない材料をきちんと持つことが大切なのだろうと思います。そうでないと学校へ行く意味が無くなります。タブレットさえ持っていれば家に居たって良いじゃないかという話になってしまいますから。そうではない魅力をどうやって創っていくか、そこが難しいのではないかと思います。

湯澤委員 私もこれを見て、素晴らしいなと思うのですが、もともとデジタルが苦手な人間として見ていると、ICTをメインストリームに置くのか、あくまで活用として捉えるのか、どちらを取るのかこれからの時代は凄く難しいと思います。

例えば先ほどの、ランドセルで重い荷物を背負わなくて済むというの

は、はたして子供にとって良いのか悪いのかという問題になると、少し荷物を持って学校へ通った方が体力がつくのではとか、そのような問題も出てくるでしょうし、あくまでもICTは補佐的に活用するのか、それともこれからの時代はICTがメインで人間生活成り立っていくのだから、それを前提にするのか。どちらを取るのか私自身も決め難いというか、それこそ我々も何でもネットで調べられる時代なので、漢字すら書けない、覚えていない、ネットで調べれば変換がパッと出てくるのでそれで文章を作れるし、でも実際に文字で書く時には忘れてしまったというようなこと、皆さんも経験があると思います。もうネットで全部調べられるし、文字もパソコンで打てるのだから、書けなくても良いじゃないかと考えてしまうと、ICTメインの生活になってしまうと思うのですが、私の中ではそこに抵抗があって、学校というのはやはり自分で文字を書いて考える場所であるかなと考えていました。

つい先日、若い棋士の藤井さん、彼が番組に取り上げられていて、彼は小さい頃に詰め将棋を散々やったと、それを全部手書きで、何万通りも書いていたと。今はAIを使って、パソコンも併用して、どうして自分は今回負けたのかということ进行分析している。若い頃そういう事もしつつ、今の時代に合わせているということで、そこまでICTに頼り切って良いのかということについては正直疑問があります。せつかくICTを使うのであれば、子供たちの学習に対する意欲や好奇心を高める手段として使うのが、子供の頃は良いのかなと考えていますが、難しいところではあります。

石井委員

1人1台の端末とは、様々な環境に置かれた子供たちが、学びが出来るようになることだと思いました。ただ、今まで対面で学習してきたお子さんが、例えばオンラインでの授業になった場合に、ついていけなくなってしまった、先生にここを聞きたいけれども、という時にはどうしたら良いのかなと思いました。本当に熱心に取り組むお子さんもいれば、ちょっと苦手意識があってついていけないお子さんもあると思うので、その場合にはどんな風に対処されるのか、疑問に感じました。それ以外には、色々な科目で発展できる学習というのは、子供にとっても良い学びであると考えています。

奈良委員

先ほどのお話で、学校ってなんだろうと考えると、学校とは知識を学ぶ学習というものと、心を育てる徳育、体を鍛える体育、知・徳・体と言われますけれども、知識を学ぶツールとしてのICTという使い方であるべきだと考えています。徳育とか、体育とか、その部分でも資料として使うことはあるでしょうが、そういうことをごちゃ混ぜにするのではなく、あくまでツールであるとは私は理解しています。それを使うことによって色々なものが深まっていくと考えています。学校って勉強だけ

教えている所だと勘違いされている方もいますが、こういう議論をする時には、学校とは決してそれだけではありませんということは、掴んで押さえておかなければならないと思います。

指導担当次長

一斉休校から分散登校、学校再開した時に、先生方が子供たちと対面した時の本当に嬉しい気持ちや、子供たちが学校へ来られることの喜びというのは、根源的なもの、学校ってなんだろうということだと思います。我々としても、これを最大限活用する方向を模索していますが、溝口先生がおっしゃるように、それでは出来ない事が学校にはあるというのが前提だと思います。それを押さえながら、それ以外のところでICTという新しい環境があった時に、我々の頭では想像できないところがあるので、色々な情報を得たり、皆さんのお知恵を借りたりしながら、進めていきたいと考えています。大事なところをご指摘いただいて大変ありがたいと思います。

教 育 長

多分学校現場も、いきなりGIGAスクールだとか、1人1台だとか言われて大変戸惑っていると思いますが、一方で、私達も教わりながらこれを使いこなしていかなければならないと思っています。教育委員会の校長会議も、3密を避けるために、いつもは一か所に集まるのですが、今はWEB会議システムを使って会場を分散させてやってみたり、または、教頭先生方の会議では、市内に70校以上学校がありますが、各学校から参加してもらって、先生が移動せずに学校から意見交換するという方向にもなっていて、実際にそうなってくると、先生方も「こう使えるじゃないか」という色々なアイデアが出てきているところかなと思います。今、何もない状態でどう使っていくのか考えていると、現場にとっても少し酷なことなのかもしれませんが、1人1台になって子供たちの様子を見ながら、「教科をこう学ばせたら良いのかな」と試行錯誤しながら使っていくのかなとイメージしています。

奈良先生、学校に居たときにはこのようなICTは無かったのではと思いますが、いかがですか。

奈 良 委 員

こういうものが出てくると新しいものが出てきたなと思って、先生方も非常に積極的な先生も多くいらっしゃいますし、逆に消極的で苦手だなという先生もいて、その温度差というのは先生の中にもあると思います。その意味では、教育委員会から先生方へのサポートが必要だと思います。現場に居た時は、私は苦手でしたから、嫌だな、しょうがないなと思っていたのが本音ですが、だんだんと周りの先生に教えてもらいながら、少しは出来るようになったという思い出があります。

教 育 長

溝口先生は医療の立場から色々なお子さんを見ていらっしゃると思い

ますが、トラブルを抱えているお子さんも多いと思いますが、お子さんにとって何か可能性を引き出すような使い方はありますか。

溝口委員

例えば、一般の授業を先生方がされる時に、下のレベルに合わせる先生、上のレベルに合わせる先生がきつといらっしゃると思います。下のレベルに合わせると上のレベルの子供はつまらなく感じてしまう、上のレベルに合わせると下のレベルの子供はついていけなくなってしまうと思います。このばらつきを少し是正できる、その子に合わせたやり方が出来るというのは、プラスになると思います。特殊な例としては、読字障害、処理障害という障害を持つ子供たち、学習障害と呼ばれる障害を持つ子供たち、その子供たちはパソコンを使えば十分に学習できるのに、書け、読め、と言われると出来ない場合があります。そのようなお子さんたちは、一部だけ凸凹があるものが上手くカバーされて学習を進めることが出来る。実際に私の所に来ているお子さんにも、読み書きが苦手なお子さんに関して、検査をして、例えば受験などで問題を読んでもらうよう、診断書を書いてサポートをしてもらうことがあります。そのような子供には、パソコンを使って勉強していける子供もいるので、ある面では偏りを持ったお子さんについては凄くプラスになることもあるでしょうし、能力的な凸凹がクラスの中にあるでしょうから、それをある程度個人のレベルに合わせてやっていくということに関してはやりやすくなり、プラスが大きいかなと思います。

教育長

今年度からスクールロイヤーとして、弁護士の先生方にご相談したりご活躍いただいておりますが、子供たちが抱えているトラブルを解決する方策として活用することは可能でしょうか。

湯澤委員

学校で子供たちが抱える問題の中では、いじめの問題も無いとは言えないと思います。この中では情報モラルリテラシーのところですが、これからのいじめは、直接何かするだけでなく、ネット上での誹謗中傷がメインになりつつある状況なので、子供たちには、せつかくICTを利用するのであれば、情報の正確性をどう判断するのか、情報を利用して発信することにどんな影響があるのかについて、学校でICTを扱う中で、危険性や問題点を勉強することによって、ネット上での誹謗中傷も防止することが出来るのではと思います。ぜひスクールロイヤーも利用していただき、ネット上の情報をどこまで利用して良いのかということも含めて、専門家なので生徒の前で教えてもらうなど利用してもらえればと思いますし、いじめなどの問題でも生徒たちにICTと相まって勉強してもらえるのではと思います。

教育長

湯澤委員からそのようなお話をいただきましたが、ICTと子供た

ち、または青少年の問題ということで、前橋市のこれまでの取組や、今後どのように取り組んでいくかについて教えてください。

青少年課長

青少年課では、ネット社会に子供たちが主体的に生きていくために、情報リテラシーを高めると同時に、その基盤となる社会性を身に付けることが大切だと考えています。社会性を身に付けるためには、家庭や地域、学校での直接的な体験であったり、人との関わり、豊かな自然体験を通して身に付くものであると考えていますので、そのような機会を作って取り組むことが大切であると考え、28年度から進めております。

奈良委員

学校ではタブレットが使えますが、家庭でのWi-Fi環境はどのようにお考えですか。

指導担当次長

まだ確定ではありませんが、LTEという、Wi-Fiが無くても使えるものが良いのではと考えています。今回の実証実験で、全ての家庭ではありませんが貸与している物についても、Wi-Fiが無くても使えます。

教育長

学びからは外れるかもしれませんが、公教育として1人1台環境を整備する意義があると思います。私学の学校はいち早く1人1台を導入しているところが多いのですが、公教育で大きな事業費を取ってこれを準備する意義はどこにあるのかと考えますと、今回学習指導要領が改訂されるにあたって、中央審議会が、10年後20年後にどんな子供になってほしいのか、というところから始まったと聞いています。「人口減少社会を支える子供たちをどういう風につくっていくのか」というところから会議が始まって、情報活用能力が言語能力と同程度に学習の基盤として必要な能力であると位置付けて今回改訂されました。となると、10年後日本の社会を支えていく子供たちは、生産性とか、そのようなことに否応なしに関わっていかなければならない。ICTの技術を活用して、少ない人数で多くの人を支えていかなければいけない子供たちになるわけです。だから、ICTに何が出来て、ICTで何が出来ないのか、どのように活用すれば良いのかということについて、子供たちが体感できる環境を私たちが整えてあげなければならないと思います。

多分10年後、ICTはあって当たり前環境になると思います。人生のスタートの時点で、そのICT環境の中に居られなかったということは、私たちは避けなければならないのではないかと考えています。しっかりとした準備が必要なのではと思っています。ICTの準備で教育格差を生まない、また、長い人生の色々な格差を生まないためにも、国も県も1人1台という流れの中で、この流れをしっかりと汲んで、大変大きなコストもかかりますが、なんとか10年後20年後を支える子供

たちのために整えていきたいと思えます。

本日お話しできなかった子供たちの学びの他にも、先生の多忙化解消や、保護者の方の連絡の効率化など、メリットが多くありますが、同時に検証していくべき課題も考えられますので、もっと時間を取って皆さんにもお考えを伺いながら進めていきたいと思っております。

教育次長 ありがとうございます。そろそろお時間も迫ってきました。たくさんのご意見をいただきありがとうございます。市長、一言お願いします。

市長 色々な委員の意見を聞いて、徳育、スポーツ、あるいは学校でしか出来ないこと、文字を書く大切さ、教師と対面して目を見つめ合う、それは当たり前のことです。今日、次長が説明したことは、授業、シラバスをどうやってICTを使って進めるかというその狭いレンジの話をしたのであって、皆さんのご心配の旨は、きちんと教師がICT利用の教育によって浮いた時間、資源を元に子供と触れ合っていくのだ、逆に触れ合う時間を作るために、ICTを導入するのだと、私はそう一方的に信じています。前橋においては、タブレット授業、校内LAN、MUNET、エデュケーションシステム、様々なことをやってきたわけだから、今までの知見を利用して、教師がICTを利用して授業を進行できるというのが、子供にとってとても素晴らしいチャンスを与えるものだと思います。空いた時間で放課後子供とキャッチボールが出来る、ぜひそういう取り組みを教育委員会はしていただきたいと思っています。そういう意味で大きく期待をしているところです。

また、最後に、今日は学校の教育の中のICT利用についてお話しただいたけれども、では奈良先生の立場だったら、これをサッカー指導で、皆同じタブレットを持っているのだから、どうやってスポーツの指導に活かすのか。あるいはお母さんの石井委員の立場だったら、子供と一緒にクックパッドで料理をつくって、その記録をアーカイブに入れて溜めていこうよ、料理上手になったね、とか。学校の授業外でこの魔法の箱をどうやって子供と親とのコミュニケーション、子供とスポーツクラブのインストラクターとのコミュニケーションの場に使えるのかという、その汎用性をどのように担保するのかという議論はこれからだろうと思うけれども、ぜひコミュニケーションの大切な機会として、せつかく家に持って帰れますから、塾に、スポーツクラブに、台所に持っていきけるかもしれない、そのあたりの寛容性を、教育長、議論していただきたいなと思えます。私の立場から委員間の議論を見た感想は以上です。

最後に、群馬県の主導で、GIGAスクールも、我々のタイムスケジュールよりは少し前倒しでやらなければならなくなりましたところ。休校中、病欠、あるいは不登校の子供たちへの対応だとか、様々なことがこれで出来るのだと思取り組んでいます、県のリーダーシップがど

のようになっているのか、共同購入だとか、あるいはクラウドのプラットフォームをどうするのか、そのあたりの内部的なことについては教育委員会にお任せしますが、早く方針を示していただいて、ICT支援員、GIGAスクールサポーター、様々な人員の確保もあるわけでしょうから、ぜひ準備を整えて進めていただければと思います。私からは以上です。

教育次長 ありがとうございます。時間になりましたので、総合教育会議のご意見の場はこれにて終了とさせていただきたいと思っております。

次回の予定につきましては、例年12月頃開催させていただいておりますので、のちほど日程についてご相談させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

教育次長 具体的な日程については、改めて事務局からご連絡を申し上げます。

教育次長 以上で本日の会議事項は全て終了いたしました。これにて閉会いたします。ありがとうございます。

(午後4時00分)